

近藤富枝

待てど

暮らせど

来ぬひとと

小説 竹久夢二

待てど暮らせど来ぬひとと

小説 竹久夢二

待てど暮らせど来ぬひとを — 小説 竹久夢二

一九八七年七月二〇日 第一刷発行
一九八八年二月二五日 第二刷発行

著者——近藤富枝
こんどうとみえ

© Tomie Kondo 1987, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京(三)四四一三二(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一五〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

目次

川の心	なすな恋	女であること	青麦	鬼火	むらさき	微笑	三人娘	港屋
144	127	109	91	74	57	41	24	7

黒船屋

300

菊坂

283

病葉

266

愁人

249

想い草

231

秘めごと

213

おしの

195

京の春

178

旅人

161

装幀 中島かほる

(いせ辰 どんたく千代紙より)

待てど暮らせど来ぬひとを

——小説 竹久夢二——

港 屋

プラタナスの街路樹が少し色づき出したところである。呉服橋の通り、角から四軒目のしもたやが、このところ急に人の出入りが激しくなったと思ったら、どうやら絵草紙屋が開店するとい
う。

「何でも竹久夢二という絵かきの店だそうだよ」

と聞きつけてきたのは近所の写真館のおかみだった。

「えっ、夢二」

聞いただけで目もとをポッと赤らめた娘に、

「オヤ、夢二というシトを知ってんのかい」

と不審の眉をよせる。

「やだわ、おっかさん。勘違いしちゃ」

と娘があわてて自分のへやから持ち出してきたのが、「カチューシャの唄」の楽譜だ。

この年大正三年の春に島村抱月、松井須磨子の芸術座が、空前絶後の大当りをとったのがトル

ストイの「復活」だった。劇中で須磨子の扮するヒロインが唄う、

「カチューシャ、かわいや、別れの辛さ」

のメロディーはあっという間に津々浦々に伝わり、その楽譜が早稲田敬文堂から売り出され、これも上々の売れゆきとなった。

金五銭なりを投じて、写真館の十六娘も机のひき出しに秘藏しているが、この楽譜のデザインが夢二で、表紙いっぱい髪に長いロシヤ娘が描かれている。写真館の娘は他にも少女雑誌に出た夢二の絵の切りぬきを小箱にいっぱいためているという大のファンだった。

「フーン。このロシヤ娘は目の大きなシトだねえ。絵草紙屋というからにゃ、夢二の版画でも売るのがかしらん」

と母親が話しているころ、噂の家では当の夢二が若い男たちを指図して、明日の開店のための飾りつけに大わらわであった。

便箋に封筒、カードに千代紙。木版画はころあいの額に入れた。すべて夢二のオリジナルのデザインである。庄巻なのは半襟で、殊に夢二は力を入れて制作した。

そもそも従来の半襟は、色なら藤色、柄なら桜か菊の刺繍のバリエーションが多い。夢二は馬蹄にげんげ草とか、赤まんまの柄とか苺だとかのアレンジで意表をついている。しかもモダンで愛らしく、ペーソスに富み、乙女たちの心の琴線をゆらさずにはおかぬ魅力があった。

「これもいいなア」

と手伝いの画学生恩地孝四郎がとりあげたのは、マッチの柄をズラリと斜めに並べた千代紙であった。

「ちょっとオ、あなた、助けてちょうだい」

突然嬌声が上る。この店の女主人の岸たまきである。

店の天井からぶらさがっている人形の靴が、折から満水のバケツを持って通りかかった彼女の前髪をすくったからたまらない。結びあげたばかりの大丸髷だ。こわしてなるものかの悲鳴だった。

「じっとしておいで」

夢二の指が巧みに人形を髪からはずすのを、たまきはじっとまっている。

見ている恩地の方が次第に息苦しくなってきた。たまきの幸福そうな表情がへいつまでもこうしていたいよ、あたしと語っている。このたまきは、

「あたし、もうおばちゃんよ」

と二言目には口にするのがくせだ。当人は恩地など若い画学生たちの自分によせる讚美の熱いまなざしを、充分に知った上でのセリフなのだからしまつに悪い。

「ホラ、これをお使いよ」

夢二が渡したいとし藤の手拭いを、かっこうよく姉さん冠りにすると、夢二の画中のひとつとなつた彼女は、おばちゃんどころか、花なら盛りのあじさいというところである。

日本橋といえ、当時大商店が軒をならべ、東京でも一番繁華な街であるが、それは大通りのことで、ここ呉服町二番地となると、しもたやの結構多い、ひっそりとした場所であった。いくら竹久夢二の人氣が大きくても、この場所での開店はかなりの冒険である。

しかしぜいたくを言つてはいられない事情が、夢二にはあった。店を借りる資金も心細かったが、こゝろで新しい局面を作らないかぎり、夢二の芸術はくずれ、たまきのヒステリーはいよいよ昂じる。場所など選ぶ時間はないのだった。

「この店を港屋という名にした。いいね」

と夢二はたまきを振返っている。

港というのは夢二の大切に行っている言葉だった。自らをさすらい人と思っている彼は、港とか、船とかに特殊ないとしみを感じていた。

「港屋は日本の娘たちのいこいの店で美術家にとっては新しい出発のための場所さ」

一方竹久丸には艦長夢二とたまきとの間に虹之助と不二彦の二児がいる。虹之助は九州に住む夢二の両親に預け、不二彦だけを手許に留めていた。

しかし子どもよりも夫よりも自分に強い関心を持っているのがたまきであった。港屋の女主人となつて、大勢の人たちの前で女優のように美しく装ってふるまうと思つただけで満足し、あとのことは考えずに承知した。

「ねえ、開店の日、何を着てお店へ出ようかしら。ホラ、ローズ色の縞お召かしら。それとも鱗模様の小紋かしら」

とたまきは夢二に鼻声でさく。準備が終らず、赤電車をのがし、恩地たちはその晩港屋の二階で雑魚寝となった。

明くれば大正三年十月一日である。昨夜泊まった恩地孝四郎、藤森静雄、久本DONなどが朝食もそこそこに飾りつけを完成する。朝になつて下職から届いた小扇子や手拭いをならべ、「港屋絵草紙店」の大提灯を店の軒先に吊した。

間口二間、奥行二間の空間が、美しいもの、かわいいもので埋まっている。

「これを表に出そう」

夢二が鳥籠を店の前のプラタナスの枝にかけた。

黒襟をかけた唐棧のきものに、更紗の帯をしめたたまきが店の隅の小椅子におさまるとこれでいつ客がきてもよろしい。

「あっ」

恩地が驚きをもらそうとして口もとをおさえる。いつの間にしたことか、たまきは眉を昔風に剃り落としていた。

もとはといえば金沢の士族のお嬢さまで、父は維新のあとも上手に浮世を渡り、裁判所の判事として羽振りを利かしたから、たまきは氣位が高い。最初の結婚は上野の美術学校出の図画教師だった、わがままいっぱい、家事は手伝い任せで、ふたりの子どもは乳母任せだった。

夫をチブスで死なせ、単身上京して早稲田の兄の店であるえはがき店つるやを手伝っているうちに、求婚されて結婚をした。たまきの方が彼より二歳年長である。

商売はつるや時代で充分に修業を積んでいるたまきだった。へ夢二の作品にひかれてくる娘も学生も、いずれはあたしに逢いにくるようになるわゝと思っていた。

港屋開店でくばった挨拶状がまた、すばらしい芸術品である。

表紙は美しい木版画で、前面に三味線をひく日本髪の方が描かれ、神父風の服装の男がエキゾチックな味を添え、背景は青海波の上を進む帆前船で、みなとやとやわらかな文字が誌されていた。

開けると、

下街の歩道にも秋がまゐりました。

港屋は、いきな木版絵や、かあいゝ石版画や、カードや、絵本や、詩集や、その他、日本の娘さんたちに向きさうな絵日傘や、人形や、千代紙や、半襟などを商ふ店でございます。

女の手ひとつでする仕事ゆゑ不行届がちながら、街が片影になりましたら、お散歩かたゝくお遊びにいらして下さいまし。

と夢二の字で美しく書かれている。

午前十時、まだ客はひとりもあらわれなかった。

いつの間にか夢二の姿が店から消えていた。若い画学生もつづけて去り、気のいい久本DONだけが残った。入れ代わりにたまきの生母の順や兄嫁のもとが祝いを持って手伝いがてら港屋へ現われる。

「しげるさんこんなときどこへいったんだろうねえ」

とさっそく順が不平そうに口をとがらかした。夢二の本名は茂次郎であった。

「いつもの病気ですよ」

とたまきはとうにあきらめた声を出す。つい二、三ヵ月前に夢二は京都の女と結婚するから別れるとたまきに宣言している。しかしいつの間にかそれは沙汰済みになり、その代りに吉原の花魁角海老楼の小式部との仲がやけぼくくに火となった。

もっとも朝っぱらから吉原通いもないから、いまごろ夢二は日吉町のカフェー・プラントンでコーヒースುತ್ತてでもいるにちがいない。

十一時三十五分、やっと客がやってきた。

「おいでなさいまし」

たまきのていねいな挨拶に、ドギマギしながら、それでも封筒を一組買っていく。例の写真館の娘だった。ふだん買っている品のより、夢二の封筒は三倍も高かった。しかし彼女は少しも高いとは思わない。なぜならそれは封筒の値段ではなくて、夢二の生んだ美の世界への支払いな

のだから……。

写真館の娘はそれとなく店内を見回し、目的のひとがいないことを知ってがっかりした。しかしたまきの、

「またおいでくださいな。夢二もいるときにぜひ」

というお愛想に満足して帰っていく。

これを皮切りに、客がポツポツと現われて、やがて午後になると、狭い港屋は満員の盛況になった。

客のなかに、夢二の絵からぬけ出したような娘がいた。髪かみの結い方はもちろん、いくらかしどけないきつつけの線から、身のこなしまで、どこからどこまでも夢二調なのだ。

年は二十一、二歳であらう。流行の市松もようのお召を着ている。

たまきの視線が、市松もようの娘の視線とからみあい、瞬間、空中で火花を散らした。そのくせ娘のそばまで寄っていった、たまきは世にも甘い声を出して、

「お嬢さま、何かお気に召すものがございましたかしら」

と首をかしげたものだ。

「アノ」

娘は首の根まで赤くなった。

そしてこんな娘がひとりやふたりではなかったのだ。娘たちは夢二のえがく女になるために、港屋へ、港屋へと毎日おしよせるのであった。

「あたしも一度港屋へ買いにいきたいわ」

と小式部は言った。吉原、角海老楼の二階にある妓おんなの本部屋である。

八畳に四畳半の次の間つき。床の間もついていて、河鍋曉斎のざれ絵がかかっている。

緋の長襦袢にきりきりと巻きつけた伊達巻が胸の細さをきわだたせ、色白の目のぱっちりした妓は二十四歳、本名を榎本りんといった。

吉原の妓が大門の外へ出るときは、身あがりといって自分ではなをつけ、供の新造に心づけを弾み、朋輩の花魁衆や内緒（楼主）にも土産を買うのがしきたりで、大へんなものいりなのを夢二は知っている。

「狭いつまらない店さ」

と夢二はおさえた。

小式部の稼ぎが、角海老楼の二十三人の花魁のなかで、いつもどんじりから三、四人目なのは、この妓の性質がおっとりして、荒稼ぎにむかないせいなのを夢二は好ましく思っている。

色の美しい花があると、香りの少し高い花があると、夢二の足はつかのまのやすらぎを求めて、そのかげに憩うのであった。

けっして長く止まることはない。港から港へとさすらう捨小舟が夢二なのであった。

「ほんとうにだめね。あなたという方は……。吉原の花魁が花ですって、きいてあきれる。親のために身を売ったなどときれいごとをいうのもみんなうそですわ。あたし矯風会の偉い方に教えていただいたわ。みんな好きで身を売るひとばかりですって」

いつものたまぎのヒステリー声が耳もとに聞えてくる。その小式部は夢二の爪をとってくれないが、

「ねえ、夜爪をぎると親の死に目に逢えないっていいますわ」

「爪を火にくべると、親の死に目に逢えないともいうよ」

と夢二はこたえ、ふたりはかわいた声で笑った。ひょっとしたら小式部も死にたいと思ってい